

のこされた言葉をたどる 駒田晶子

今年には若山牧水生誕百三十年目。角川「短歌」七月号は牧水特集を組み、伊藤一彦著『若山牧水 その親和力を読む』が刊行された。

角川「短歌」の牧水特集は、月刊誌らしく、幅広い層の書き手により、牧水のあたらしい一面にふれられるような気がする。四十三歳で死去した牧水だからだろうか、四十代歌人四人が、自分にとつての牧水の一首を選び文章を付ける試みは、自分の人生のどの地点から牧水を考えるかの違いがくつきりしていた。晋樹隆彦氏による「牧水の名歌35首選・解説」は、酒と哀愁の歌が多く選ばれ、選んだ歌より、書き手の個性が感じられた。

『若山牧水 その親和力を読む』は、長きに渉り牧水を敬愛している、伊藤一彦氏の渾身の一冊。多くの文献を比較しながら、牧水作品の読みを深めてゆく姿勢に打たれる。「Ⅱ運命の女―小枝子」の章が、やはりドラマティックだ。

・明月や君とそひねのままにして氷らぬものか温き身は
・みじろがでわが手にねむれあめつちになにごともなし何の事なし

歌集だけではなく、初出の掲載誌を調べ、作品を時間の流れとともに並べてゆく。この丁寧な作業により、一首目はまだ牧水と園田小枝子が結ばれておらず、二首目は悩みや惑いを越え、小枝子

と結ばれることにより、自信を持った自分を高らかに歌っている、と導く。他の章でも、『別離』の一首ずつの句切れに着目し、小枝子への思いで浮き沈み、高揚する牧水の姿を、歌集の構成とも合わせ、一首ずつをていねいに読み解く。ひとりの歌人に寄り添いながら読んでゆくことよってしか味わえない深みを感じた。きつちりと一首の意を汲みとる技術のたいせつを思った。

『長田弘全詩集』を読んだ。「全詩・集」ではなく「全・詩集」。巻末に付された「場所と記憶」に、長田さんの人生が、自身のことばによつて書かれている。圧巻だ。出合った本、そして、そこから書いた詩を知ることができる。何を読むことよつて詩人のところが耕されたのか。どんな土壌から芽を出し、育て、一編の詩、一冊の詩集が実を結んだのか。

「言葉が死んでいた。／ひっそりと死んでいた。／気づいたときはもう死んでいた。(中略)言葉が死んでいた。／誰が言葉を殺したか?／「わたしだ」と名乗る誰もいなかった。」「言葉殺人事件」(一九七七年・晶文社)「言葉の死」より。この詩集は、長田さんが詩を書きはじめた一九六〇年頃に刊行された『中国詩人選集』(岩波書店)の一卷をなす吉川幸次郎『宋詩概説』によつて宋詩によつて惹かれ、読む日々がなかつたら、出されなかつたであろう、と著者自身が振りかえっている。家系図、ではないけれど、どんな作品に影響を受け創作していたか、人と作品が線となり結ばれてゆく様が見えて、興味深い。そこから読者がつながってゆく線も生まれるだろう。長田さんは、わたしの生まれ故郷の福島県福島市出身。のこされた言葉を丹念にたどる作業は、ひとりの人生と向き合い、誰かの人生につなげてゆくことなのだ、と思う。